

スケトウダラ日本海北部系群・太平洋系群資源評価担当者会議 議事概要

日 時 令和7年10月8日（水）～15日（水）
場 所 メール会議

概要：

水産研究・教育機構（以下、機構）の資源評価担当者（以下、担当者）により、スケトウダラ日本海北部系群・太平洋系群を対象として、資料「令和7年度の資源評価にて漁獲量固定・繰越を行う将来予測の試算依頼への対応（案）」を会議出席者（有識者、参画機関、機構）にメールにて共有し、検討・議論を行った。その結果、両資源ともに資料案は承認された。

各資源に関する資料案の概要、主な議論等：

【スケトウダラ日本海北部系群】

《資料案の概要》

本系群について、TACの固定およびTACの繰り越しに関する水産庁からの試算依頼に対応して試算を行った。その結果、漁獲量固定シナリオにおいては3年固定の場合は2.9万トン以下、5年固定の場合は2.7万トン以下であれば、固定期間に漁獲圧がMSY水準以下でTAC全量と漁獲することが可能であった。繰越シナリオにおいては、 β が0.9のとき5%、 β が0.8のとき15%を上限に翌年に繰越して、全てを漁獲したとしても10年後の目標管理基準値案に達成確率と漁獲圧が F_{msy} を上回るリスクから判断して許容可能であった。

《主な議論等》

- ✓ 参画機関より資料の書きぶりに関する各種指摘があり、適宜修正等対応した。
- ✓ 参画機関より、繰り越し率を許容する判断基準について、実質的には漁獲圧が F_{msy} を上回る確率が1%未満であることについて確認があり、担当者よりその通りであることを回答した。
- ✓ 参画機関より、以上の判断基準ではSH会合等で厳しすぎるとの意見が挙がりそうとの指摘があり、担当者より現行の漁獲シナリオにおける繰り越し率（TAC当初値の5%まで繰り越し可能）についても、今回の試算と同様の判断基準としていることを回答した。
- ✓ 参画機関より、試算の内容が難しく漁業者への説明には十分に配慮すべきとのコメントがあり、担当者より5年前の検討結果との対比ができるようにあえて資料の書式を5年前と揃えているが、SH会合等ではよりわかりやすいスライド資料で説明する予定であることを回答した。
- ✓ 参画機関より、多くの年齢で構成され未成魚の豊度もある程度把握できるスケトウダラでなぜ「いずれの漁期年においても漁獲圧が最大持続生産量を達成する漁獲圧を超

えない」必要があるのか質問があり、担当者から、資源管理基本方針でも漁獲圧が MSY 水準を上回らないことが基本とされていること、また漁獲圧が MSY 水準を超えることを許容した場合に管理初年度に極端に多い漁獲をして翌年以降にほとんど獲らないような現実的ではないシナリオを科学的に認めることになることから避けるべきと回答した。

- ✓ 資料案は書きぶりに関する修正を前提に承認された。

【スケトウダラ太平洋系群】

《資源評価報告書案および研究機関会議資料案の概要》

本系群について、TACの固定およびTACの繰り越しに関する水産庁からの試算依頼に対応して試算を行った。その結果、漁獲量固定シナリオにおいては3年固定の場合は15万トン以下、5年固定の場合は12万トン以下であれば、固定期間に漁獲圧がMSY水準以下でTAC全量と漁獲することが可能であった。繰越シナリオにおいては、 β が0.9のとき5%、 β が0.8のとき15%、 β が0.7のとき25%を上限に翌年に繰越して、全てを漁獲したとしても10年後の目標管理基準値案に達成確率と漁獲圧がFmsyを上回るリスクから判断して許容可能であった。

《主な議論等》

- ✓ 参画機関より挙げられた日本海北部系群における書きぶりの指摘については、太平洋系群においても適宜反映することとした。
- ✓ 参画機関より漁獲量固定のような試算を行う意図について質問があり、担当者からTACが安定する等のメリットおよび当初の予測より資源が減少した場合に過剰な漁獲となるリスク等のデメリットを回答した。
- ✓ 参画機関より漁獲量3年固定の場合に15万トン以上16万トン未満で固定が可能な値を確認すべきとのコメントがあり、担当者より15.9万トンが可能と考えられるので、SH会合までに試算して確認し、当日の議論に備えることを回答した。
- ✓ 資料案は書きぶりに関する修正を前提に承認された。

その他：

座長より、両資源の資料について、10月16日午前を目処に水産機構HPにて公表することを周知した。

以 上